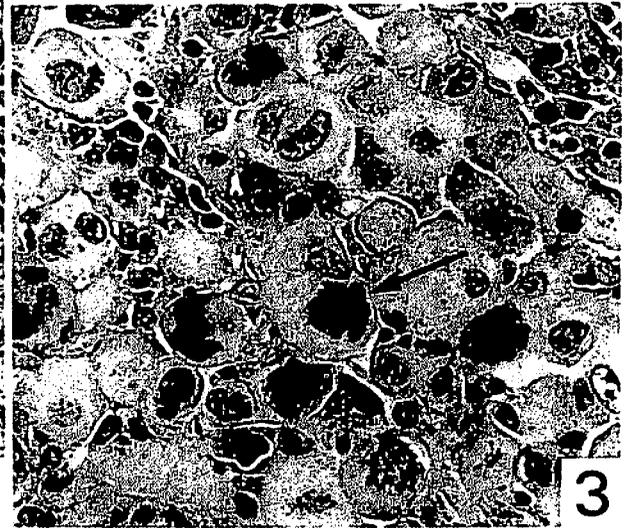
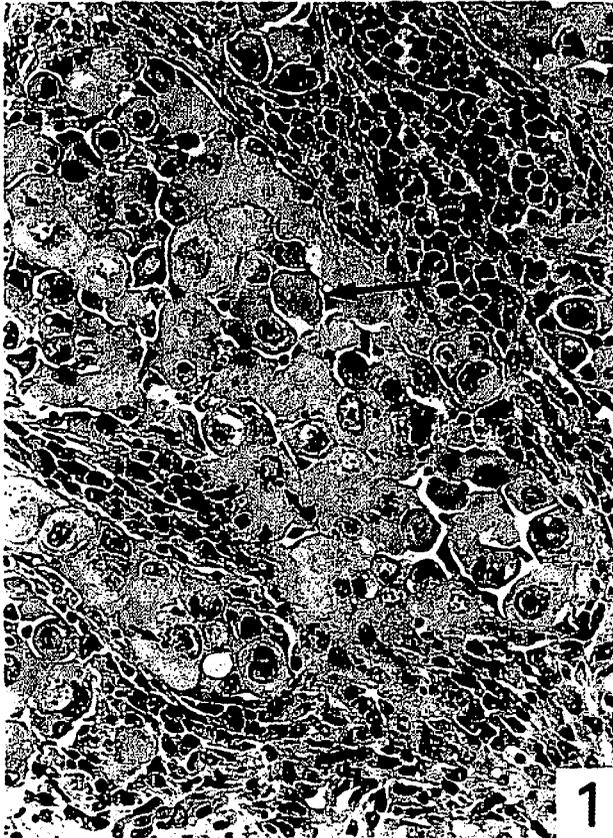


牛の胸腔内腫瘍

家畜衛生試験場病理第2研究室出題

第19回獣医病理学研修会標本No.301



動物：ホルスタイン種♀7才。(屠場例)。

臨床事項：剖検1カ月前より消瘦，乳量減少が目立ち食欲減退していた。体格は大であるが，栄養不良で胸垂の浮腫と頸部リンパ節の腫脹が認められ，搬入時には横臥していた。申告病名は創傷性心外膜炎であった。

肉眼所見：頸下から頸溝にそって肘関節下部におよぶ深部と第1から第6胸椎の肋骨結合部付近に連珠状の腫瘍，肺門部の4ヶ所に腫大リンパ節状の腫瘍，右肺後葉実質内，左腎臓表面，および子宮角部のおおのにおにウズラ卵大の腫瘍が認められた。腫瘍の外観は帯黄灰白色で結合織性の被膜に被われ，断面は分葉構造を呈し帯黄灰白色であったが，10%ホルマリン固定後は帯桃灰白色を呈した。

組織学的所見：組織学的検索は頸部，肺門部，肺実質内の腫瘍について行なった。腫瘍細胞は扁平上皮様であり，結合織線維によって大小の島状に分画される蜂窩状構造を示し，基底膜も認められた。腫瘍細胞はエオジンに淡染する細胞質，円形ないしは不規則小嚢状で中等度にクロマチンを有する核および1コから複数個の明瞭な核小体を有していた。ミトーゼは極めて希であった。腫瘍細胞の細胞質内にはエオジンに濃染し光を強く屈折する大小の顆粒(図1：H-E染色X200 小矢印)とPAS

陽性の顆粒が認められ，PAS陽性の顆粒には周囲にハローを持つ球形のもの(図2：PAS染色×400)と細胞質のかなりの部分を占める粗大なもの(図3：PAS染色×400矢印)があった。腫瘍細胞には不全角化(図1：大矢印)や脂肪浸潤を認めるものも見られた。間質にはプラズマ細胞やリンパ球が見られた。頸部と肺門部の腫瘍組織には，リンパ球の著しく集積する部位と，リンパ洞の構造の明らかな部位が認められた。肺実質内の腫瘍では小葉間間質のリンパ管内を中心に腫瘍細胞の著しい増殖が見られ，実質内へも蔓延していた。

病理学的診断：本症例は扁平上皮の細胞の特徴を持ち，いわゆる扁平上皮癌の一種と考えられるが，細胞質内にPAS陽性の顆粒を有する点，腫瘍の分布が頸部および縦隔付近を中心に見られた点などを合わせて，上皮型胸腺腫と診断した。

文献に見られる上皮型胸腺腫の組織像は多彩であり，かなり異なった特徴を持つものが上皮型として一括されている。これは正常な胸腺に何種類かの上皮細胞が存在することと関係していると思われる。今回の腫瘍細胞はその性状から，胸腺髓質上皮細胞やハッサル小体と関連性が有るのではないかと思われる。